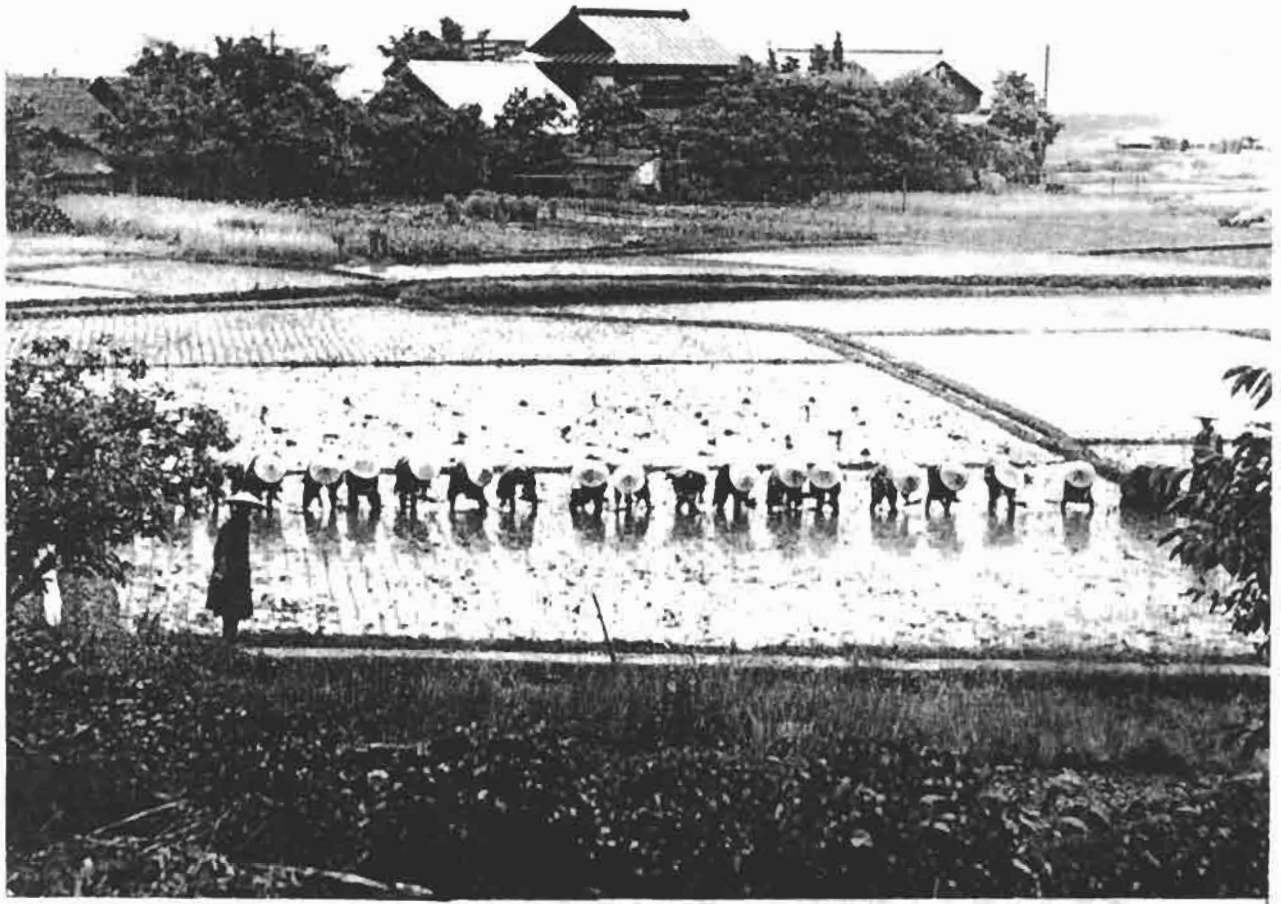


中川根ふる里通信

= 第9号 =

編集・発行・モペラフ中川根
 連絡先 〒428-03
 静岡県榛原郡中川根町上長尾
 中川根町役場 総務課²⁷⁰
 ふる里通信係
 TEL 0547 (56) 1111
 郵便振替口座(仮) 7-91556



過疎になったと言うけれど

昭和30年頃の高郷と今日の変化



写真提供

高郷

沢西光雄様

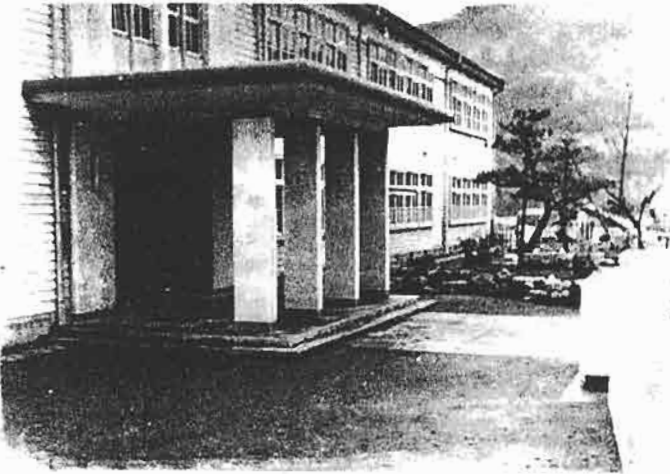
4月15日

役場屋上より

その9

母校は今

= 徳山中学校 =



(一) 大井の流れ水清く朝な夕な鏡に
 練りが磨きしこの熱血も
 示せ徳中 我が健児
 (二) あゝ青春の胸高く希望漲る若人の
 若き血潮のおどる時
 徳中健児の意気高し
 (三) 鍛え鍛え 幾春秋
 ……
 ふる里の山河に二度とこぼます
 事の遠い私達の母校徳山中学校の
 応援歌です。
 一 正しい批判力を持つよう。
 二 進んで協力して行くよう。
 三 豊かな情操を養おう。
 これは徳山中学校の目標語でした。

東西に木造二階建の校舎が二棟並び、
 校舎の西側は運動場。北側校舎の東に
 講堂を配した徳山中学校は、現在は、
 鉄筋三階建の具立川根高校と姿をか
 えております。
 私が徳山中学校に入学したのは、昭和
 二十九年。当時、中川根村と徳山村との合
 併の話が、とりざたされていた時でした。
 徳山中学校は、中川根村・藤川・徳山村
 坂之内・田野口・下泉・壺町河内・東川根村
 文沢地区の各々の生徒四〇〇人程を用し
 志不那徳山村・榛原郡中川根村学校組合立
 徳山中学校と名称を呼ばれて活動して
 おります。
 東西に並んだ二棟の校舎。その間を渡
 り廊下で結び、廊下の西側に生徒のゲ
 タ箱が置かれ、その反対側は、生徒の手
 洗場が設けてあります。
 北側校舎の東に講堂があり、全校生徒
 の集会場。又日常はピアノが置かれていた
 ので、音楽室として使用されておりました。
 南側校舎の南にバレーコート、バスケットコ
 ートがありました。バレーコートの横に大
 きなケヤ木が一本立っており、このケヤ木
 は、川根高校の現在でも、徳山中学校の生
 き残りの主の如く、雄姿を誇って面影を
 残し、堂々と元気にそびえ立っています。
 南側校舎は一階は一年の教室、二階は
 二年の教室で、北側校舎は一階は割烹室、
 放送室、職員室、校長室、理科室、二階
 は三年生の教室と図書室、和室等とな
 っておりました。当時学校に畑がありま
 して、職業家庭の実習という事で、地域
 別に生徒と畑を別け与え、生徒の自主的
 な管理運営で、私達は三年生の指揮の
 もとで、マーマイもや、大豆を収穫した想
 い出があります。

思い出と云えば、昭和三十一年十月六日、中川根村
 と徳山村が合併し、その記念行事として、山中
 学生による中徳両村の交換行進が行なわれて、
 私達は、中川根村の下長尾地区、久保尾地区、瀬沢
 地区と国旗を振って祝賀行進を行いました。途中、
 久保尾地区から瀬沢地区に移動中に、わか雨に
 あい、山道を雨宿りする所もなく、雨中行進に
 なった事が印象に残っております。
 印象深い出来事と云えば、卒業間近にあった
 徳山地区の大火であります。
 昭和三十三年三月一日午後二時頃、教室でホーム
 ルームの時間中、火災が発生。先生の指導のも
 とで生徒が動員され、家財道具の持ち出しや、
 強風に煽られて屋根や畑に、所かまわず爆発す
 る火を、生徒がアリアを散らした如く消火に走
 り廻り、延焼を防ぐ大きな力となりました。
 十二戸焼失という大火でしたが、あの時の生徒の
 活躍は後に感謝状をいただく結果となりました。
 が、中学生時代の思い出として忘れる事の出来
 ない出来事でした。
 私達は昭和三十三年徳山中学校を卒業しま
 した。やがて六年後、昭和三十八年七月徳山へ



へ中学校は、中川根中学校と統合となり、徳山中学校の歴史は終りを告げることになりまし。

徳山中学校の名は消えましたが、徳山中学校は新たに県立藤枝東枝川根分校として発足しました。
 校舎も施設もそのまま継がれ、やがて生徒の増員するともに、校舎も施設も順次取り壊されて、新しく近代的な鉄筋三階建の校舎とかわり、学校も独立して県立川根高校となりまし。

運動場も、駐車場、テニスコートに変わり、川根高校のグラウンドは、南側の竹藪ニヘクアール余を開発して、新たな運動場を設け、体育館、武道館、弓道場、プールと体育施設が完備され、今や徳山中学校の面影はありません。

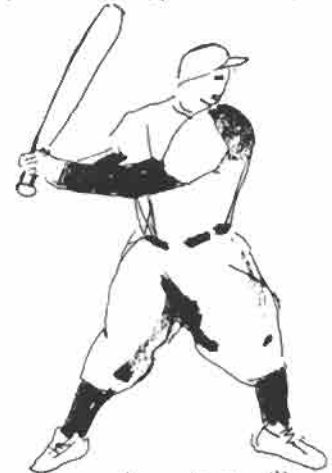
今面影を残し、残っているのは、先程も申し述べましたあのケヤキ木と、当時校庭の土手に植られておりまし、桜の木となりまし。

今はなき徳山中学校ですが、多数の卒業生、先輩、後輩の皆々様が、社会で御活躍、御成長されている如く、我が母校徳山中学校も、立派に川根高校と成長変身して、その意を継承しております。

末筆に、徳山中学校同窓生諸君の御発展と御活躍を祈り、終らせていただきます。

昭和三十一年度卒業

比敷 田 智 美 哉



中川根町商工会主催

新春講演会より

川根高校

寺田正太郎校長

先日、本川根町で観光シンポジウムが開催され、そこに参加させてもらった。そこで感じたが、中川根の未来はバラ色ばかりではない。
 道路が良くなったも、中川根はよくなるばかりではない。
 話によると、奥大井には年間六十万人が、おとすれて、いるとの事であるが、三百六十五日で割ると、一日当り千六百八十八人となるが、ほとんど我々の目には触れない。すぐに年間百万人になるだろうとの話だったが、そうなら、もほとんど我々の目には触れないように思う。
 よく考えないといけない。

地元と運命共同体である川根高校も、今のままでは、二学級の分校と、なってしまう。川根高校名が、無くなってしまう。ますます、イメージダウンしてしまう。

昭和四十年には、百七十九名の入学者がいたが、昭和六十二年には、百五十七名であり、このままいくと、六十二年には、百二十名位しか入学者が、なくなってしまう。学校関係者の消費も減り、地元にも、少なからず、影響を与えることになる。

今後は、老齡化が進む事になり、老齡化と過疎化に、どう対応するかが、大きな問題である。

今の若い人は、価値の判断基準が、おもしろいかどうか、おかれており、おもしろい↓楽しい↓損得勘定という構造になり、農家には、今まで以上に、嫁が、さにくくなるように思える。

過疎に対処する為、に親も、下流階級の意識を改革して、地元定着率を、高めてもらいたい。

更に、地元には、伝わる技術とイベントの形で、将来に、伝承して、いっただらうだろう。又、老齡化の進む現在、二万人に、一ヶ所の老人ホームが必要であるという、特別養護老人ホームも、是非考えてもらいたい。

ここで、発想の転換を、図って、地元の、後継者対策、過疎対策の一環として、一つ提案したい。

まず、全町一体として、国際結婚相談所を、実施してはどうか。次に、集団移住を受け入れる、緑の準備を、したうどうか。移住によって、手等な、地場産業の、労働力を、確保する、など、伝統技術の、伝承を、して、いっただらう。か、来るべき、二十一世紀に、向って、全員で、大同団結を、図って、町の、振興に、努力しなければ、ならないと思ふ。

中川根町商工会広報・商工中川根より転載

「清流」 25年におもう

高畑 智

今私の机上に「清流」の第三号から第四十七号まで三十冊がある。創刊号が見つからず。また、全巻が整わないのが残念だが、今年が四十八号が発行されようとしている。つくづく、継続の力の大きさと、この間の苦勞を思う。昭和八年徳山中と中川根中が統合して、現在の中川根中が発足。「清流」もこの年に生まれた。「清流」の名づけ親は、森健作先生。創刊号巻頭に「清流」とは、のびゆく若人の心であり、安んじてありたい。「清流」新しく誕生する中、中誌名にふさわしき名と信じ、「清流」に寄せる。先生の熱い心を託している。そして、「清流」で中川根中の三年間、心を清め、体を鍛えて、三十八年度卒業の三百二十名をトップに、六十一年度の九十七名まで、実に四千三百九十二名の清流「子」が巣立っていった。三十八年度の第一回卒業生の中に、今や中川根町の本流の中堅として活躍の青年もあれば、わがふる里やよしと再び清流の里に帰って、「発電所」をまわし、かんがい用水となり、飲料水となつて、町づくりに励む若者がいる。また、多くはふる里の清流を出て大海に身を投じ、「渦巻く激流となり」(「L」は、創刊号巻頭詩より引用)雄々しく荒波の突、社会を生きている。おそろく、何れの地に在つても、母校よ栄えあれ、清流「子」たちよ、健やかであれ、ノノと母校を偲び、別れた友、師、後輩にちのこを思つて、いる、ことだろう。

この子たちの卒業を前に発行された第三号の編集後記がおもしろい。(N)長決、O(小沢正先生だろ)うか)

N「この文集を二十年後に、みんなほんん気持ちで読むのかな」

O「そのころは、みんな、いいおやじやおふくろになつて、自分の子供に読んで聞かせているのもしれないわ」

その通り。第一回卒業生の中に、今、わが子が中三という親が十人を越すし、わが子が中中生という親は、四十人余りあろうか。彼らの中に、小学校の先生、保母さん、寺の住職がいる。茶栽培の篤農家、森林業者の働き手がいる。役場の係長が、また会社で、農協で、銀行でと、だいたいはポストを占めている人もある。

全員が書いた「卒業の言葉」に「リッパな理容師になりたい」「患者さんに好かれる看護婦さんをめさす」と決意を語つて、その志を果たしている人がある。遠く外国に嫁した子もあれば、生家の家業を継いだ主婦がいる。みんな、みんな、清流の子たちである。清流の若者は、たくましく成長したのである。今年はその彼らも四十才。

私は、彼らが徳山山の三年の時、上長尾山の六年の時を担当しているから三十八年度卒業三百二十名、中百二十名を知っている。そのう行き交つた、鼻ひげをたくわえた彼の少年の目の童顔をなつかしく思い出す。

十号から十八号までは、わが子がお世話になつた三年間だから、「清流」をよく読ませてもらった。その四十三年度卒の彼らも今年が、三十五才。「先生、来年は長男がお世話になりませう」と、ついでの間、頭を下けた母親が、この中にいた。こうして次から次へと、親の遊んだ清流に、その子たちが、また上がつてくるのである。

「清流」は十八号までは、学期ごと、三回発行していたが、四十四年度に十九号、二十号、間をおいて、四十七年度、二十七号より、年二回の発行となつた。そして、五十三年度三十九号から、一年一回となつて、今年に及んで、いる模様である。

初代増田校長から、小田・芹沢・久野・中村・小沢校長と名だたる校長が、穿いた中川根中の三十五年。堀畑・長決・小沢正・小田・杉山・柳下先生と、地元の国語教師が、編み、継続発行の灯を守つてきた。「清流」歴史は息づいて、伝統が光っている。先輩たちの足跡が、鮮明に印されている。そして、この清流から、国語教科書採用の詩が生まれ、果年刊文集や、「学制発布百年記念文集」詩岡の子ども」などに収められた、珠玉の光を放つ名作が出て、清流の所産である。清流に遊んだ若者たちの光の跳躍である。

私にも、三十八年から十年間、大井中・本川根中の学校文集「わか草」を編んだ思い出がある。また、「おおい」から「なかつちゅう」まで、二十五年学校だよりのペンを走らせた経験をもつ、書くことは楽しい、作ることは喜びである。続けることは、努力のいる、ことである。が、ねうちのあることでもある。

「清流」が、中川根中の発展と共に、今の勢いをもって、伝統を継ぎ、更に新しい文化を生み育て、歴史をつつていくことを、心からねがうものである。

中川根中学校文集「清流」より転載致しました。

高畑先生は、今年三月末、中川根中学校校長をもち、三十八年間の教職にピリオドを打たれました。今年に、歴史を迎えられるとの、ことです。その間、何人の何十人の何百人の、何十人の子らを、教へ導かれた事でしょう。ふる里通信を御覧の方は、是非先生に、御一報をお願ひします。私方に、好意で贈られて来た、いた学校より、「なかつちゅう」は、居ながらにして、中川根中の様子を生ましくと見え、楽しみを待っており、す。

どうも、ありがとうございます。(編)

同級会

堀 畑 章 子
(旧姓 鈴木)

雪見荘までの道程は、かなり遠かった。小学校の時の同級会が開催されるという喜びの心には、大時間はどの車の中での時間は、とても長く感じられた。ほとんどの人が、中学校卒業後、三十年余の再会であった。高ぶる心を静めきれず、「みっちゃん」「しーちゃん」としちゃんを抱き合っている。涙のじみおろしを押しさすられた。

「あの人がだれだっけ？」と全く判らない人、この人は場所違いではなかったかと思っていたら、「この人は、としちゃんよ」と言う。「あ、すずさんの鐘の劇の時、子うさぎの役で口ずさんでましたっけ？」とお堀を呼んでお堀と言った。奈夜間と子ちゃん。とその変化の激しさにびくくりした。

小学校五年・六年と担任していた奈夜間先生をお迎えして、三十九人西伊豆町の果てでの再会は、とても楽しいものであった。奈夜間先生には注意をいたさなくとも、腕白な男子の子と、個性の強い女の子達の四十八名の集団は、転任して来られたばかりの先生にとり、非常に扱いにくいクラスであると思われる。

しかし、やうやくの中で、草花を育てること、校外の畑で麦を育てること、運動場を耕し、まづま芽を作り、おやつに蒸してくれること。校舎の周りの掃除、廊下磨き、一つ一つの経験が皆、頭の中の一かけりと刻みつけている。

花村君がすぐれた体格の持ち主であったので、草花へかける肥し担ぎをやったことを詳しくそうに語り、「母親は奈夜間先生がお前の腕白を直してくれたい」と母親に言いつけられてきた」と話してくれた。そしてどの人も異口同音に「先生がやってくれた、稲むらの火の紙芝居はよかった。特にゴーンという鐘の音は、耳に残り離れない」と言う。

その紙芝居は、先生のホクトマネで求めて、私達に見せてくれた。たのもろであり、教室に掲げてあり、雑誌も先生が買って来てくれたものだった。(ホクトマネで)

休み日には先生のお宅に伺い、本をむかひ、読ませてもらった。また、先生にお借りした本の中で、日記の書留は私と本好きへと導いてくれた。



今、花を大切に育てようとする心は、あの時、自ら先に立って花作りを指導してくれた先生の熱意、いやな所、とてもきつた所を率先して先生がきれいに直されていく姿、尊敬の中で浮かんだのは、消えては消えかんでいった。

「教師には向かない自分」語られた先生のお話の中に、卓越しい識見と枯淡の味を感じさせられた。

お酒が違えば、四十年前の少年少女が、その頃に思い思いの花を咲かせ、夜の更けるのを忘れて語り合った。四十八人中、三十人は郷里を離れ十八人が市内に住居している。

「中山振を尋ねてね。」「中山振所を覚えてね。」

自分達の頼みを新たに担任者に託し、帰りのバス同乗した。

バスの中では、「今日の日はさようなら」の歌を口ずさみ、それぞれが家路へと帰って行った。

一泊二日の同級会を思う時、草の香、水の清らかさが甦る。そしておやつ代りのイチゴやイチタドリの味覚が、昨日のように思いあふれてくる。

また、豊かたへ(心)集りかた幼い日の生活の情景が浮んでくる。

先生の声、お母さんの声、友達の声、どなり声、笑い声、そして悲しい思い、おは涙を誘う。

それは友達の顔と共に思いあふれる、みんな健康で幸せに暮らして欲しいと、ただ祈る。



特集 大井川



ふる里を流れる大井川の水が多目的に利用されている事は、皆さん御存知の事と思います。水力発電をはじめ、上水道、農業用水、工業用水と、様々な用途に運用されています。

ここに、これまで大井川、その膨大な水量は、人間に管理される様になりました。

その結果、通常時、三川根地区から大井川本流は川原を流れず、導水トンネルを流れるようになりました。

ここ三十年、我が国の産業、経済は急速な発展を遂げ、生活もつて想像出来ないほど豊かになりました。大井川を取り巻く環境は、ある時は「きり」と、又目には見えないほどではあるが、確実に、様々な変化として来ています。

大井川に関する現状を、過去未来を踏まえてお知らせします。

今年に入って、新聞やテレビなどマスコミが、大井川の状態、特に我が町の塩郷ダム以下の砂漠化、上流の土砂堆積などの報道され、県内外から注目されております。今、三川根は、中部電力発電所の水利権更新の時期を向かえ、大井川の維持、流量確保の運動が展開されています。

三川根町長を先頭に、川根三町大井川問題対策協議会が、発足され、陳情も、国会、建設省、自治省など、地元河川協議、大石代議士も御同行され、回を重ねて来ましたが、又、町の代表者が、中部電力支社本社へ陳情にまいりました。去、一月三十一日には、川根町において、「総決起大会」が実施され、大勢の町民が会場を埋め、町内パレードもくりあげられました。プラカードには、

一 昔の大井川にもどせ！
二 中電よ命の水をかえせ！
三 浸水さわきは、もうこりこりだ！ と、かけられ、同

文のポスターが、町民各戸に張られました。

川根三町、意を一つにしてと言っても、各町それぞれ事情もあり、町内の運動の展開は、水利権更新期対策協議会を中心に、地区説明会を各所で開催して、住民に状況説明が行われ、熱のこもった集いが開かれています。我が町長の徳場さんの「水と緑に恵まれた豊かな生活のできる町」への精進にも頭が下ります。青年団による、塩郷ダム下での「水の人文字」や、大井川ルネッサンス運動、など住民サイドの運動も行なわれています。

既に、本川根地区内の二発電所は、水利権更新済となり、河川管理者の静岡果知事の朗読文は次の通りです。

「知事朗読文」

一 維持流量について

(1) 六十三年三月三十一日に水利権更新期が来る(更新済)大井川発電所、大間発電所については、水利使用規則にもとづき、四月一日から次の量を放流する。

大井川ダム 毎秒一・五トン
寸又川ダム 毎秒〇・七トン
大間ダム 毎秒〇・六トン

(2) 六十四年三月三十日に水利権更新期が来る川口発電所の塩郷ダムについては、中部電力社と協定書を締結し、今年四月一日から毎秒三トンを放流する。

(3) 地元の増量要望については、今回更新を迎える、両ダム及び、塩郷ダムから、本年四月より次の量をめやすに、試行的に放流し、その様子を見て、放流期間及び放流量を決定し、中部電力と、六十三年度中に、細目協定を締結し放流したい。

塩郷ダム 毎秒五トン

大井川及寸又川ダム合わせて毎秒三トン

二 塩郷ダム上流部の土砂排除について

中川根町の高郷付近やその上流の土砂堆積については、今後果、町中部電力社で対策を検討し、早期に実施したい。

そして、四月一日午前十時、塩郷ダムの六ゲートの一つが、数センチ開かれ、放水のサイレンの鳴る事なく、水が流れ出しました。

三トンの水の流れは、大井川の広い川幅には、あまりに細いひとすじの流れですが、これからは、年中、この流れは、大平

野まてとどきます。そして、四月十四日、

齊藤静岡果知事も塩郷ダムに視察に来町され、今後九月まで毎秒五トンの試行放流を実施する事になりました。「この流れを生活のバックボーンとして豊かな町づくりをすすめる

水の魚のこった三十五年来の苦勞を、取り戻してほしい」のあいさつは、

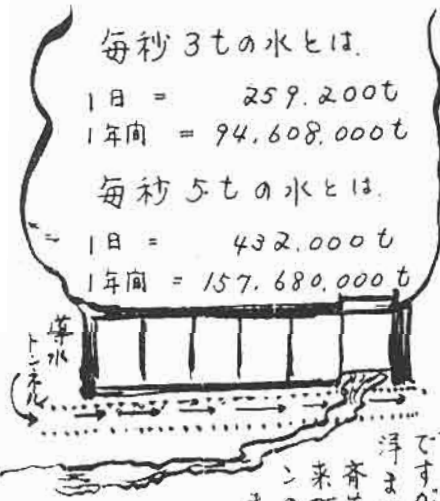
これまでの運動の成果と、今後の大井川への望みにつながる事と思

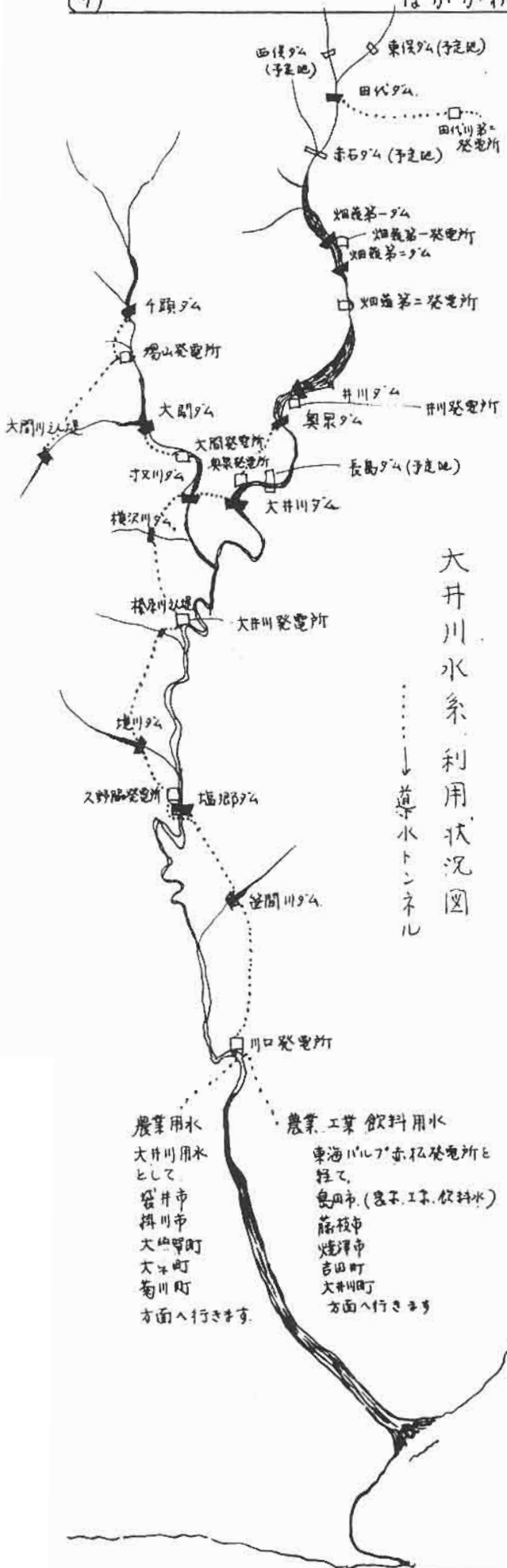
毎秒3tの水とは、

1日 = 259,200t
1年間 = 94,608,000t

毎秒5tの水とは、

1日 = 432,000t
1年間 = 157,680,000t





大井川水系 利用状況図

大井川の特徴

南アルプスの地形は 地質学的に山の一生から見て、壯年期の比較的早い時期とされています。大井川の水源は、標高約3000mの間の岳です。南アルプスをおおう、無数の沢が山を削り、深いV字谷を造って大井川本流となります。よから、満ち年期(例北アルプス)にならば山は削られ続けたら、加えて、中央構造帯に位置する為、岩石はもう崩壊もおこりやすい。特に台風時ほど大出水時には大量の土砂が川に流れ込みます。

大井川は、源から駿河湾まで長さが180kmと、我が国有名な大河川ですが、流域面積は1,280km²と少ないのが特徴です。これほどの河川が静岡県内だけを流れている、と言う事も、別にか無いです。

年間降水量は2,700mm² ~ 3,200mm² (全国平均1,800mm²) と、多雨地帯となっております。

電源開発の歴史

大井川の特徴は、電源地帯として脚光を浴びました。明治43年、日英水力電氣株式会社の本川根町に小出発電所(1,400kW)が建設され、同時に、東海パルプ地名発電所の中川根に建てられ、昭和35年まで稼働しています。

昭和6年、大井川鉄道全谷千頭間及昭和20年代に、千頭~井川、及、オウサキ上流に、森林鉄道が間通して、湯山、大井川、大間、又野原の各発電所が建設されました。

昭和26年、中部電力(株)が誕生してから、発電所建設は、さらに急ピッチで進められ、31年、奥泉、32年、井川、33年、川口、36年、畑巻第一、37年、畑巻第一の順で、大井川水系の発電設備の合計は、最大出力が86万kWとなりました。

発電型3種

- ① 水路式 = 川の上流に堤(取水ダム)を作って、水を取り入れ、長い水路で、適当な落差がとれる所まで導き、専らその方式で、開発初期の型式で、発電能力も小さい。
 - ② ダム式 = 川幅が狭く、両岸が高く、きりかたにダムを作り、水をせきとめて、人造湖を作り、その落差を、利用して、発電する方式で、大井川水系では、井川発電所、畑巻第一発電所がそれです。
 - ③ ダム・水路式 = ダム式と水路式を組み合わせた方式で、ダムでためた水を「圧力送道」で下流に導き、落差と、さらに高くして、発電する方式で、大井川水系では、残りの7発電所がそれです。
- ④ 注) ダム、水路式の圧力送道が、水魚し川とつくります。

水利権

前ページ記載文中、水利権の文字が、何回か出て来たが、その前に、書いて説明してみますと、水利権は①許可水利権と②観光水利権に分かれています。

① 許可水利権 = (河川法23条) 電力、飲料、農業用など、〇〇の為に利用を許可するという事。

② 観光水利権 = 昔から今までのと、続けられている権利 (例: 箱根用水、芦ノ湖水権組合)

水利権許可の期間

- ・ 発電用水 = 30年
- ・ 農業用水その他 = 10年
- ※ 権行水利権は期間はない。

更新の際は調査した上で、新たに許可する形を取る。

④ 発電用水利権の30年の長期間の理由は、電力供給という、公共的産業であるからと、使用後(発電機と回線)は、川に水がもどけると言う、特徴があるからと、言われています。

河川管理者

- ・ 建設省が定めた一級河川は、(建設大臣)で大井川では、全谷町、島田市(川口発電所下流21km)下流を言います。
- ・ 県が定めた一級河川は、(県知事)で大井川では、建設省より上流地域と言います。

次ページへ続く。

ダム開発によって

(1) 海岸侵蝕 《大き。ダムが出来ると海岸侵蝕が始まる》

雨が降るたびに山は少しずつ削り取られ、川が運び、やがて海に流れる。大井川上流部は、前ページでも紹介した様に多雨地帯で、海岸線に、多数の砂浜を造る土砂を供給してきたが、ダムが出来ると土砂はせき止められ堆積してしまう。砂浜30mは、5mの高さの堤防に匹敵するといわれますが、大井川の土砂の一部がダムに堆積されて、30年も過ぎないのに、海岸線がやせていった事は、静浜、和田浜、乙女が丘、大前、ほろの久能海岸の現状を見れば判ると思います。高い防波堤、波消ブロップが、消えた砂浜の代わりに荒波を防いでいるのです。この様な所は全国各地に見られます。先日NHK「水紀行」で川根が紹介されましたが、同局「くると海を30キロで、黒部川が紹介され、海岸侵蝕の恐ろしさを目のあたりに見た時、あらためて自然の力の大きさを知らされた気持ちでした。『あはれ黒部が牙ぬかれ』

川の三大作用



(2) 中流域のダムによる上部河床の堆砂 《塩郷ダム》

人家のない上流部のダムと異なり、塩郷ダムが造られてから中川根町と本川根町(一部)は台風時に何度か浸水被害を被っています。建物、道路の浸水、田畑の冠水と、台風時には予測のつかない浸水におびえかっています。(高野地区) 河床を下げる為に、ここ数年砂利業者が、毎日砂利取りをしているので、『川相が変わった』と、徳嶋町長は言われます。川面の高低をうらなった川は、洪水時にここに本線がおしよせると予測がつかないので、大井川特有の赤石も青石(蛇紋岩)も丸っこい石も姿を消して、小砂利だけが目立ちます。

(3) 水無し川 《導水トンネルが通っている地域》

- ◎ 井戸水が出なくなった = 川根町家山地区は、湯水期になると井戸水が干上がって『飲料水の無くなる』と言う深刻事態に被っています。表流水の無い川には、表面の乾燥化が進み、コンクリート状になり、地下水への影響が出るとです。
- ◎ 川霧が立たなくなった = 冬から早春にかけて、大井川の水蒸気が立ちこめ、枚歌や民謡に歌われた川霧も、川の水が少なくなるにつれ、発生しにくくなり、川根卒への影響が心配されています。川霧は、茶の木の寒さと乾燥から護ってくれていたのです。
- ◎ 魚の住めない川 = ダムにより、鮎などの上流部が出来なくなっており、それとは別に、湯水期の魚は、川の流れが止まり、徐々に水たまりが出来、そこに身をよせています。雨が降らなく、やがて水が無くなると生き行けないのです。何匹もの魚がやがて死を待つ姿は、あまりにあはれです。

◎ 遊泳禁止 = 夏休みの楽しみと言えば、水遊び、魚釣り、と多くの入道が大井川の思い出を残している事と思います。自然の川の流と、父に兄弟に、再上の茶に、又自分の体験とおして学んだものでした。川の様子、水の色、流れ具合、夕立の時など、川の事を知らなければ、水遊びは出来なかったし、親がいなくても、近所の子らと連れ立って出かけたものでした。ここ15年ほど、中川根の川、中学生は『大井川で遊ばない』が夏休みのきまりに出ています。理由は、『危険だから』、『決まった事だから』、『汚いから』、『プールがあるから』、『...』などと言われ、『水が無いかから』と言う事ではありません。夏休みの季節は、水量は豊富で時期、あちこちの沢や小川、など支流の水を集めて、500物位の水は流れるのです。お盆休みの頃、ふる里へ帰った皆さん、涼を求めて、キャンプに来た入道が、水遊びを上げて、川で遊びます。地元の子ともは遊べないのです。この時期育った子供のふる里のイメージに、『川とふれ合う』と言う意識は生まれない。いっても過言では、ないと思えます。



昭和二十七年頃、大井川で遊ぶ子供達。題名、河童連の集い。写真提供、高野、沢西光雄さん。この河童連も四十余歳となり、あつ人はふる里に残り、又あつ人は都中へ出ていき、よき父になつていまして、うへと榮えち。



徳川幕府の天領として、三百年もの間、行き止まりの地形、豊かな流れ、は内戦の防波堤の役目と政治的に利用され、我が国東西文化の分起点とされてきた大井川。すでに開発しつくされている、と思われ、今後四つのダムが計画されています。(三ヶ月前山手線)その中の長島ダム(建設者)は多目的ダムで川口発電所以南の利水の為に造られます。大型ダムで中川根には洪水調節の利があると言われています。又大井川の水は上流部(三軒山屋)の田代ダムから、山梨県早川の東京電力発電所へ送水されており取水口から毎秒五トンの水が取られている事は、あまり知られておりません。

電源開発の歴史は地元に大きな活力を与えてくれたと言われております。中川根においても戦時中の藤川(三津間)にかけての導水トンネル工事、境川ダム工事は別として(戦時下における強制労働)、大正(昭和初期)の東海バブル地名発電所に付帯する工事には地元民も入夫として請負われ、昭和恐慌を切り抜け得たと言われ、昭和三十一年頃、川口発電所建設促進協議会も出来、塩郷ダムは発電所付帯工事による、地元へ深まる利益を期待した結果も、えん堤橋や下泉(川根町身成間(現在島田方面主要道)に立派な道路も建設された。工事地区はダム景気に沸いたという。

町村合併をばはむものそれは大井川の流れとジャンジャン橋の時代である。三十年前同発電所水利権の意見者として拘ったある人は、当時大井川が水無し川になるだろう事も、上流(ダムより)部土砂堆積、洪水時浸水の事も判断しかねたと言った。けれども後者は意外と早く進化した。大井川中流も久野脇から川根町抜里にかけて有名な「鶴山の七曲り」蛇行地帯である。入口の塩郷ダム附近は是非に川幅が狭い。その上に立派な橋柱が六本もあり洪水時には、えん堤は全開されても上流部は自然(川の淀み)が出来るのである。淀みは砂と小砂利を手土産においていった。

科学の進歩は目ざましく、テレビに映し出される、観測衛星からの画面は日本中の地形が箱庭の様に見える。そこに、大井川の流れの中断を見つけた。四月一日より、一週間の流れではあるが上流から下流へ行ったと言います。今までの運動の大きい成果だと思えます。が、川口発電所・久野脇発電所の水利権の更新は六十四年三月三十一日なのです。先きかけての塩郷ダムからの放水は、静岡県知事か与えてくれた大井川を観察、研究する期間、言いかえれば、未来三十年の流れを確保する重大な期間だと思えます。この一年、大井川に、全力傾注の町政であらうと期待しています。と同時に、私達も出来るだけの事をしなければと思えます。

三トンの放水の為に中部電力(株)は年間六億円の損害だと言います。が大井川水系総発電力の最大出力は五十六万キロワットで、浜岡原子力発電所四号機中、最小出力発電の二号機に相当すると言われています。

ふる里通信に激励のお便りが来りました。ありかとう、町長さんもようこんでいます。ご紹介しよう。

感激ダムの放水

東原覚一(久野脇出身、浜松市在住)

錆びついてか？三十年も開かなかったゲートが開き放水……住民の総意という無形の運動力によって遂に僅かとは云え、放水が始まった。これは夢のようで、塩郷ダムが消える時があった。町史に残り、永く後世にまで伝えられることであろう。

中川根町においては、徳嶋町長さん、三川根の町長さんが先頭に立ち、住民の皆さんと一丸となつての強力は、運動がゲートをこじあげ、放水させた様なのだと思います。

運動も相手が公共企業であるところにむづかしく、多かつた、ことと思ひます。これによって、かつては悪評の「河原砂漠」も遂に消え去らうとしていることであろう。

同じ国の一級河川である四国の四百斗川は地形こそ違つても知れないが荒れたところは一つもなく、昔そのままのきれいな流れをしているそうです。大井川にも僅かとは云え、澄みきったきれいな水が流れることによつて、その頃の情景が浮かび子供の頃が実に懐かしい。川ではウケイ、ハヤがつかれ、そして夕暗近くなると、あちこちのセセリギにおいて「カジカカエル」の合唱が開き、その音は実に素晴らしい清流のみに聞くことのできる自然の恵で、河原砂漠ではこれが全くない。がそれも近い将来見ることが聞くと、こころで喜ぶことであろう。

ところで子供の頃、カジカが鳴くと教えられていたので、カジカと云う魚が鳴くとばかり思っていました。実際には「カジカカエル」というカエルが鳴くのだから、このカエルは美声をかわれ、山口県周辺では天然記念物に指定されているようです。

私は十六歳で離郷していましたが、そこがどんな過疎の地であらうと、生まれ育てられた故郷は懐かしい。私が久野脇妻が藤川の出身です。共に双手を上げての感激でした。人には皆んな故郷があり、それを望郷の念は厚く、私も同様で、少年期と老いた今、その念ひとおど、その中間の若い頃は、仕事で一杯で忘れてはいないが、振り向く暇はなく、ダムの出来る頃の様子は全く知りませんでした。昨今は職場を離れ、十数年、同伴を兼ね妻と川根路へ川根路へヒトドラブも平均月一回が近況です。川根路特には、このダムの下流周辺に故郷のある人々は皆んな同じ気持ちだろうと思ひます。兎に角、この運動を先頭にたて進めて下さった徳嶋町長さんを始め、町の有志、そして多勢の住民の皆様、感謝の気持ち一杯です。

にしが 嶺の
西上

中川根のむかし話より = 藤川の里 =

平松



幾年月藤川を見守って来たのか
残念ながら この様に枯れてしまいました。

藤川の西方に西平という所があります。その西平のうう山の道を登っていくと、とても見はらしのよい所へ出ます。そこは西上嶺といって、ここからの眺めは大へんすばらしい所です。ここに立って北の方を見ると、榛原川奥地の山々がいくえにも重なり合って見え、南の方を見ると、大井川の流れと川下の様子が見え、遠くまでながめられ、東の方に目を向けると、前方に本城と高山が、また、すぐ目の下には、大井川をはさんで藤川、徳山、沢間の村々を一目ではっきりと見下ろすことができます。さらに西方に目をうつすと、水川河内の山から白羽山が見え、そのいくつもの連なる山の向こうに、西日の沈む美しい光景が見られる。それはすばらしい所です。

そこに樹齢数百年をこえる大きな松の木がありました。幹は太く枝は広がり、根もすしりとはって、それはそれは堂々としたみごとさで、松の木でした。山仕事に行く人たちは、ここで足を止めては、「実にいい松の木だのう。」

「まったく、かっこうのよい松だのう。」

と見上げては、言葉と交わって行きました。

ところで、この松の木は、大きいだけでなく、枝が平らになっていくので、ここに座って、辺りの景色を見たり、枝から枝へと、飛び移ることができるので、いつの間にか『てんぐ』の遊び場になっていました。夜のしうしう明けをめるころ、また夕日が山に沈むと、するころ、松の枝で遊ぶてんぐの姿を見た、という人が出てきました。そこで村の人たちは



「あの平松はてんぐ様のお休みになる木だ。」

「松の枝を折ったり切ったりしちゃう、いかんよ。」

「枝一本拾っても、てんぐ様が怒って、ばちをあてるぞ。」

と、言いあうようになりました。

そんなある日のこと、村の女の人がこの松の枝を拾って家に持ち帰り、ご飯を炊こうとして、かまどの中にくべました。すると、どうでしょう、毛虫が一匹、黒ずんだ体に、針のようにとがった毛をいっばい生やした、大きな大きな毛虫が、かまどの中からはい出てきたのです。女は、びっくりして、おそろおそろかまどの中をのぞいて見ました。そのとたん女は

「おおっ。」

と驚き、

「きゃあ。」

と悲鳴をあげました。見ると火の中から、一匹、二匹、五匹、十匹と、驚くほどたくさん毛虫が、うじゃうじゃとはい出して来るではありませんか。女はそのまま腰を抜かし、その場にすわりこんでしまいました。それを見た家の人たちも驚き、騒ぎだしました。そのうちに、かまどの火が天井に燃え移り、やがて、家じゅうに広がって、とうとうまる焼けになってしまいました。

このことがあってから、この松の木は、今までも枝ぶりとさらにはよく、葉の緑をいっそう濃くして、

「西上嶺の平松は、ほんとうに美しい松だ。」

「ゴージャスのボツの松はすばらしい松だ。」

と、いっそう評判を高くしました。そして、やがて

「あの平松には神様がやどっておられるそうなん。」

と、言われるようになり、道行く村人たちは、みんな茶の葉を供えたり、頭を下げてたりして通りました。

そうしてある冬の、山にはいりこんで炭焼きをしている一人の男が

「ああ、さぶいさぶい、木の枝でも集めて、たき火をして、ぬくまるとしよう。」

と、言いながら、枝集めに来ました。そして低くたれ下がった平松の枝を切り、山小屋で火をたき、あたろうとしました。ところが、急にぱたりとたおれて、そのまま死んでしまいました。

村人たちは、この話を聞いて、ますます平松を恐れ、また、大事にしました。

それから後も、松の木はさらに大きく、さらに形がよくなり、堂々と

構えたその姿は、西上嶺にひときわ目立って見えまゝだ。
その後、村の氏神様が火事で焼ける前の榎松に

朝日さし 夕日輝く 木の下に

こがねいく万 ばかり数々

と書かれてあったのは、この平松の木の下のことだと言われている。また、西平の池の元に住んでいた龍神が、野守の池へ追われる時、落として行った守りぶくろの中の小判に刻まれていた。

木木公赤龍 雙鱗 金子千貫 銀子千貫

の言葉の龍の形をした赤い松は、この平松のことだと言われ

「平松には、お金がたくさん隠されているそうよ。」

「宝物がいっぱい隠されているそうよ。」

「よし探し出してやろう。」

とお金も宝も求めて松の根元を掘り返してみる人々が、つきつこと

いたようですが、探し出した人は「か、たとえわたくしよす。」

昭和の初め(二年ごろ)になって、『心聖清浄』を唱える信者が藤

川を訪れた時、「大木の元で修行せよ」と神様からのお告げを受け、その

お告げの小高い山へ登ったところ、その頂上樹齢八百年を超えると思

われる松の大木に出会いました。そこで信者は

「この大木こそ、宇宙大自然の真理の象徴である。」

と深く感じ、これを『法元松』と名づけて修行の場とし、信仰の松と

したそうです。

この松は枯れてしまい、太い根元だけが残っているだけですが、今も

信仰され、大切にされています。

※平松の別名

大笠松 笠を広げたような松の名

てんぐ松 天んぐ様が遊んでいた松の名

法元の松 信者がつけた松の名

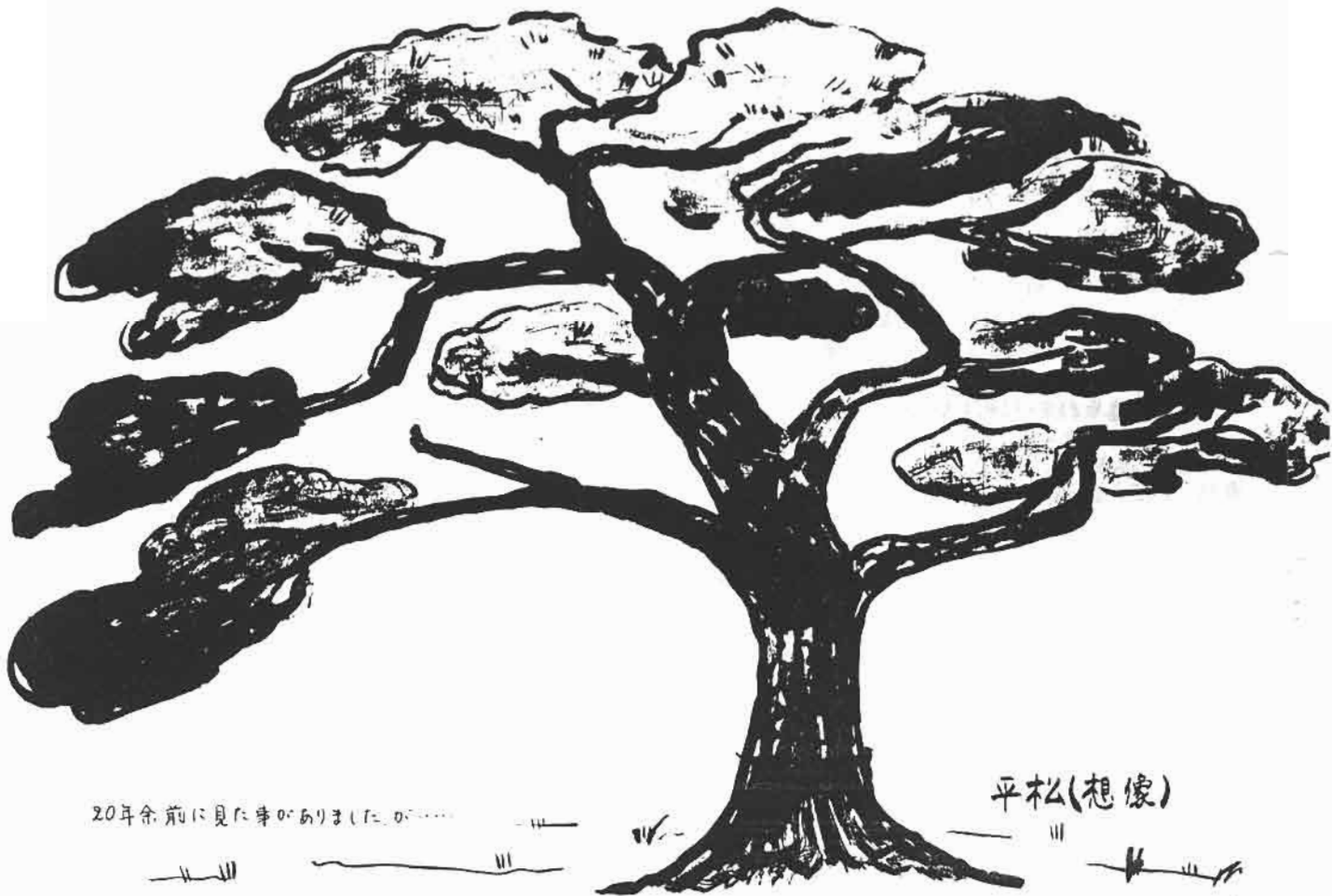
コージのホツの松 、『コージのホツ』は松のある所の地名

「ホツ」とは峰のことです。

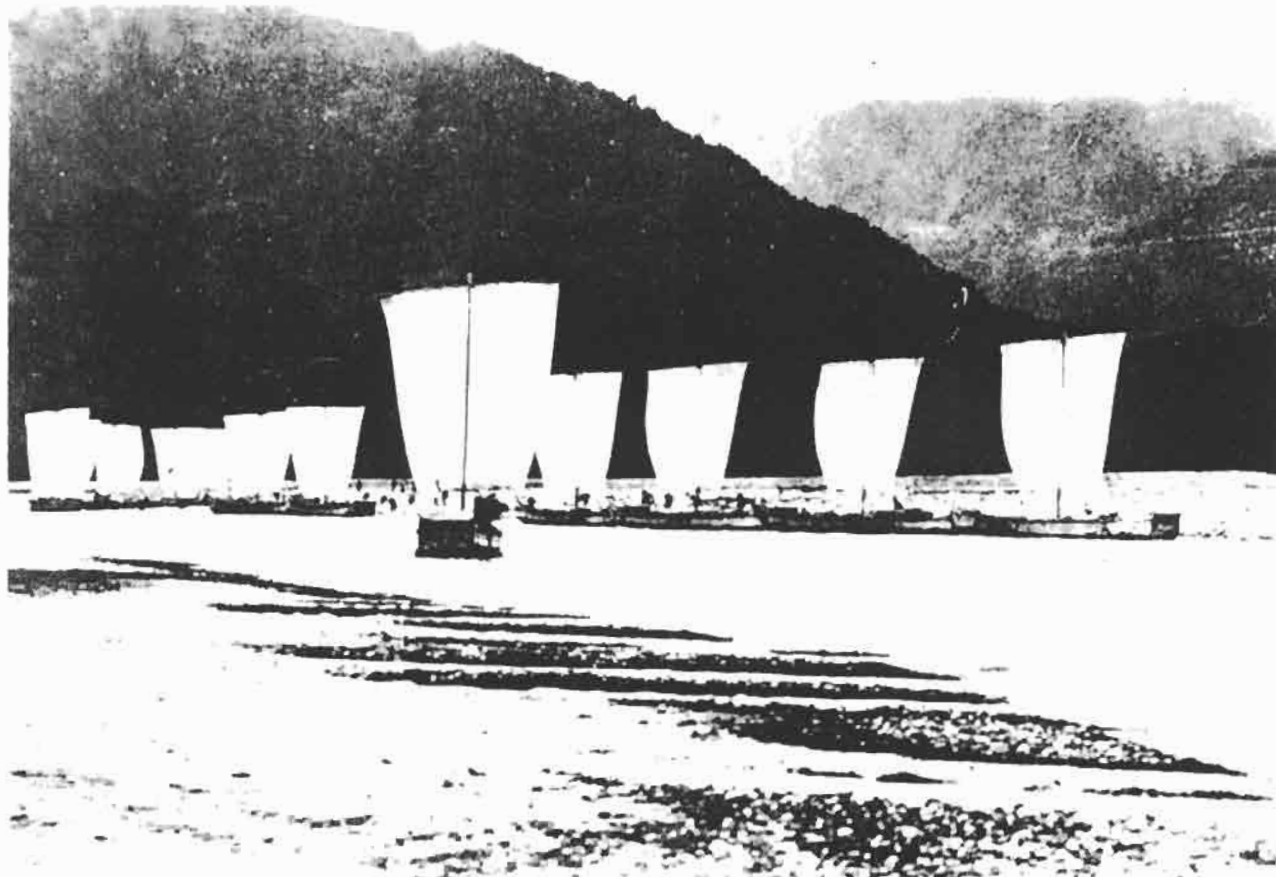
旧藤川小学校の遠足は、平松行が恒例とされていたそうです。

大札山方面へ通じる一本道で、最近では、平松附近より奥まで、車で

20年余前に見た事がありました。



平松(想像)



暖冬の影響か、何時にもなく、芽ぶき開花が遅れました。大札山方面の赤やしおも例外でなく、ゴールデンウィークが見ごろとなります。

大井川の流れ、今年から夏場は塩郷ダムより上流は水量がありますから、是非遊ばに来て下さい。魚つり、水あび、ボート下り……地元の子ども達も、さつと遊べる様にならと思っています。そして、水の神様津島様奉納の流したいはゆたりと流れ送り金の仙様は牛に乗って流れて行く、模型でもいい。川のたや、高瀬舟を浮かべて見たい。河川美化に努めながら……と夢はふくらみます。

ここ数年大井川の勉強をして来て、ここに住ながら知らない事があまりに多かった事を反省しました。知れば知るほど、大井川は遠いもの、天領は今も続いているんだ。の、実感があります。自分の身にならなければ他人事、今は芦の湖の水を指とくわえて見ている箱根の入達の心が痛烈に判ります。が、中川根の女は、大分臼杵湾保護の為に体をこらした女社達の様な事も出来ません。やはり甘いのでしょうか。

春と言えは、別れ、出合いの季節です。三ページの三月まで川根高校にいらっしやうな、寺田校長先生も、一度原稿をお願いしたいと思つていたところ、転勤されてしまわれました。ふる里通信用でなくて、町の商工業者の為の御意見でした。ふる里通信に載せておいていただきました。

今回号は、例号と異なりふる里の背負っている現状をおつたえしました。が、もうすぐ茶期到来、夏の号では活気あるふる里をおとどけたいと思つています。御意見、御感想、投稿、お待ちしています。

定期購読のお願い

「中川根ふる里通信」は有料発行です。
I部 千共100円
皆様の定期購読申し込みがこの通信の発行を支えます。
年間4回(季刊誌)の発行を予定しておりますので、年間予約400円位振込まれることをおすすめします。すでに期間が切れている方と今回で満期になる方には郵便振替用紙を同封してあります。引き続き購読いただければうれしく思います。
申し込み先 〒428-002
静岡県榛原郡中川根町上長尾990
中川根ふる里通信係
郵便振替口座(名目)7-81556
電話のお問い合わせは
0547-56-0015

自己紹介

年齢 43才 (昭和19年生)
職業 主婦兼 家業手伝い (地場産業、養村)
家族 7人 (母(姉) 夫 子供4人)
趣味 ｽｰﾎﾟｰﾂ、下子な換好きでなんでもやる。このころはバドミントンヒューモニック、このヒトリ、元氣そうに見える。
体型 なし、いときば子供で
特技 なし、いときば子供で

